

方式・日程	問題番号	出題分野	出題内容
A方式 11月3日 問題▶P.32~	第1問	理論	化学結合、混合物の分離、周期表、溶液の濃度、身の回りの化学
	第2問	理論	化学反応の量的関係、pH、中和滴定、熱化学、電気分解
	第3問	理論	希薄溶液の性質、化学平衡、反応速度、気体
A方式 11月4日 問題▶P.34~	第1問	理論	化学結合、イオン、原子の構造、溶液の濃度、身の回りの化学
	第2問	理論	化学反応の量的関係、緩衝作用、中和滴定、熱化学、イオン化傾向、電気分解
	第3問	理論	混合気体、コロイド、化学平衡、希薄溶液の性質

## 傾向 ◀ 理論分野から幅広く出題されている。

### 1 出題形式

3大問の構成で、マーク数は各日程とも22個だった。5~6個の選択肢が用意されている問題が多いが、8~9個の選択肢から解答を選ばなければならない問題もある。

### 2 出題内容

無機、有機の分野からは出題されず、理論の各分野から、偏りなく出題されている。第1問は理論分野の「物質の構成」から、混合物の分離、化学結合、原子の構造、溶液の濃度、化学と人間生活などが出題された。第2問は理論分野の「物質の変化」から、化学反応の量的関係、pH、中和滴定、金属のイオン化傾向、水溶液の電気分解、熱化学などが出題された。そして、第3問は「物質の状態」、「物質の変化」から、気体、希薄溶液の性質、コロイド、反応速度、化学平衡などが出題された。

### 3 難易度

知識問題は、用語の空欄補充や実験器具に関する問いなど教科書レベルの基礎的な問題が多い。正誤問題は、各選択肢で問われていることに対して、正確な判断が要求されており、曖昧な知識では正解に至らない。計算問題は、教科書の例題レベルを中心とした内容であるが、電気分解に関する量的関係、気体の体積・温度と圧力、凝固点降下と分子量、反応速度、化学平衡など、受験生が苦手な手薄になりやすい分野からの出題も見られる。

全体としては基本から標準レベルの学力を問う良問の構成となっているが、推薦入試では理論分野のみの出題となっており、一般入試よりも範囲が狭い分、理論分野について幅広く出題されるので、偏りなく、より正確な学習が求められている。

## 対策 ◀ 教科書の内容を理解し、問題集で演習を積んでおこう。

### 1 教科書の内容を正確に理解しよう

化学基礎の全範囲、化学の理論分野から出題されているが、分野に偏りがなく、教科書の内容を正確に理解していないと答えられない問題が出題されている。教科書は太字部分の用語や定義、グラフや図、欄外の補足説明まで含めて隅々まで読み込んでおく必要がある。

学校の授業で習う内容は確実に理解しておこう。また、授業内で扱った実験は、器具、手順、結果、考察まで押さえておこう。さらに、授業では扱わないが教科書に載っている物質の特徴や化学反応式などもノートに付け加えよう。これらの内容をノートにまとめる際には、色鉛筆を用いたり、表に書き直したりするのもよい。教科書、授業の内容を一通りまとめたノートは、問題演習や過去問演習に移った後もあやふやな点が出てきたときに戻って見直そう。

### 2 教科書の例題などの基本問題をマスターしておこう

知識問題、計算問題のどちらも、授業内で扱う例題、教科書傍用問題集、定期試験などの基本レベルの問題は、すばやく、正確に答えられるようにしておこう。

推薦入試では、理論分野のみであるが、密度を用いた質量パーセント濃度やモル濃度の計算、燃焼反応などの化学反応とその量的関係、中和滴定における濃度の計算、電気分解に関する量的関係、化学平衡など、さまざまな分野の計算問題

が出題されている。問題文を読み、数値を取り出し立式し、計算しなければ正解できない問題も多い。公式に当てはめてすぐに答えが出る問題だけでなく、さまざまなタイプの問題の演習を行うことにより、本学の計算問題に対応できるようにしておこう。

### 3 正誤問題の対策も行おう

本学の試験は、大学入試センター試験とほぼ同じ体裁で、選択肢の数が多きものもあるマーク解答式である。特に正誤の正しい組合せを選ぶ問題では、すべての正誤を正しく判断出来ないかと正解にならない問題も出題されている。問題演習の際には、誤りの選択肢について、自分で正しい記述に直す練習をしておこう。

### 4 入試直前期は、過去の問題で実践演習をしよう

教科書や問題集などで一通り基本的な内容を身につけたら、本学の複数年度の過去の問題を用いて実践的な演習を行おう。間違った問題や自信のない問題は、教科書やノートに戻って再確認することにより、記憶や理解をより一層深めることができるであろう。また、時間に余裕がある際には、推薦入試を第一志望とする場合でも、一般入試の過去の問題の理論分野を中心にできるだけ多くの演習を行い、本学の化学の試験の形式、内容に十分慣れておくことは効果的な対策になるであろう。